

コロナの中で「生きる力」とは何か

牧師・園長 今野善郎

幼稚園は「生きる力」の基礎を育む学び舎です。「生きる力」を養うため、基本的な生活習慣の確立と「生きる力」を「遊び」の中で豊かに育むことを意識した保育を考えてきました。今回の新型コロナウイルス感染で、出口の見えない長い「外出自粛」を経験し、その上第2波が来ないかを恐れ、根本治療薬・ワクチンもいつできるのか明快な答えがない状態で、皆様もこれまでにない大きな不安とストレスを覚えられたことでしょう。私は9年前の原発放射線被害を福島で経験し、その時も見えない恐怖との闘いでしたが、放射線は計測ができ、しばらくして屋外で体を動かして対応できたのに対して、今回のコロナは全く動けない息苦しい忍耐を強いられ、福島とは異質の不安でした。この期間、二つの心理学用語を知りました。

レジリエンス

レジリエンスとは、外的な衝撃にも折れることなく、立ち直ることのできる「しなやかな強さ」のことです。「レジリエンス」とは、もともとは「反発性」「弾力性」を示す物理の用語でした。ここから、「外からの力が加わっても、また元の姿に戻れる力」という意味で使われるようになったのです。「復元力」「再起性」「治癒力」などと訳されます。ヨットはこのレジリエンスで設計されています。不利な状況でも、そうした困難を自身の生き方にしなやかに対応しながら、反転して新しいものを生み出す力です。

ネガティブ・ケイパビリティ

これも訳するのは難しい語ですが「負の能力」、すぐには答えが出ない事態に耐えながら、手頃な答えに飛びつかず、分からなさ、不思議さに耐え、中ぶらりんな状態に踏みとどまり続けることのできる能力です。そのなかで性急に事実や理由を求めず、不可思議さや疑念を抱え込み続けることで、人と人との生身の対話を可能とし、相手をさらに深く理解する力です。

薩摩おごじょの連れ合いは、私に「あなたは打たれ弱い」と言います。確かに、人からの非難や自分の失敗を抱え込み、長く引きずるタイプですから、顧みればこの「レジリエンス」と「ネガティブ・ケイパビリティ」が養われていないのは、実は私かもしれません。

「生きる力」は、人から褒められ認められる体験や主体的に挑戦してできた達成感などで育まれることは確かです。それだけでなく、子どもたちは、今後も未知のウィルスと対峙しなければならず、人間社会で生きる中で避けられない不条理にもまれながら大人になって行くことでしょう。コロナを体験し、ようやく幼稚園がスタートするこの時、園生活での葛藤やもめ事、失敗、喧嘩などのネガティブな体験を大切な教育の場として育み、不確実な時代を生き抜く確かな強さを養っていきたいと願っています。

2020.6.1